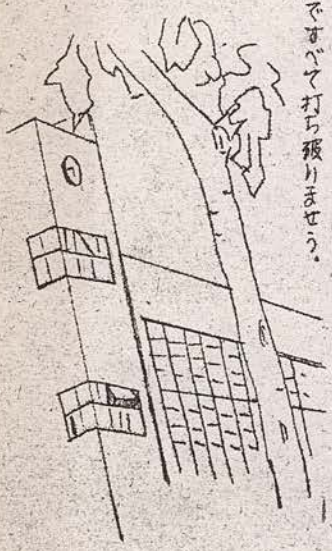
大阪経専
同窓會報
第一号
昭和二十四年三月十五日発行

大北文次郎

こゝに大阪経済大学設置認可を卒業生諸君に報ずると共に、この目的を達するためになされた諸君の御協力御支援に対し心より謝意を表します。この設置認可により大学の枠は与えられたが、これに充実せる中味を盛ることは、われわれすべての責務であります。大学設置基準に合するだけで満足せず既設優秀大学にまさる大学をつくる覚悟で進まねばなりません。然るに大学設置と共に否これにもまして嬉しいことは、黒正先生のお帰へりを迎えることであります。私たちはこの日をいかに待ち侘びたことでせう。わが学園はこゝに精神的中心を取りもどしたのです。黒正先生を中心とする団結の力、私学の行手の幾障害もこの力ですべて打ち破りませう。



理事長　第一回　市原卓爾

同窓会員の皆様、御元気で日本再建のため、御活動のことをお察し申上げます。

今般時代にふさわしい清新なる構想のもとに高遠なる理想を掲げ力強く「同窓会報」の発刊を見たることは学芸文化の発展は申すに及ばず同窓会発展の上にも多大の貢献をもたらすであらうことを思ふ時、関係者各位の御努力に対し、満腔の敬意を表すると共に絶大なる期待と信頼をかけるものであります。

さて、此度母校も大学基準に則って目項者等の欲望する恩師黒正先生を学長に迎え大阪経済大学に転換発足する運びとなり、今后名実ともにふさわしい学園永遠のゆるぎなき基礎を築き上げたるは、学園関係者一同の並ならぬ御苦心が実を結んだものと無限の感謝と心より感謝を捧げるものであります。

斯く学園の劃期的な時期に際会しましたので吾々同窓会員は申すに及ばず在校生諸君とも共に互に手を引き合って母校発展のために絶大なる御協力をおねがいしてやまない次第であります。

臨時総会開催

母校の昇格を祝して、左記により臨時総会をひらきます。
知友お誘いの上、多数御出席下さい。

一、日時　四月十日（日）午后一時

一、場所　阪急ビル西館七階

昭和廿四年三月廿三日

大阪経済専門学校同窓会

理事長　市原卓爾

第三回　渡辺達好

大病の苦悩を出でて早やすでに三年、初めて同窓会便りの一片を書くことの祝会を翌日に控えて喜びを感じ、遠隔に思いつめていた感想のくさぐさが矢継ぎに思い浮かぶ。されど筆をすすめようとすると何から先に書いて良いやわかりない境地に追い込まれてしまいました。嬉しさ——

我くも悪運つきず満今日生きながらへている自分を見て、最大の幸福と感ぜずにはおられないことだけは、はっきりお伝えする思います。

学窓を出でて昭和十二年で丁度から戦争突入し友好適会期に遭遇していた私共かへりみて、先輩、同僚、後輩にして此の戦の第一線に参加しない者は殆どなかったことでありましょう。吾身の存在に比べて悲傷なる戦争の犠牲となられた先輩、同僚、後輩の身の上に思を馳せれば、胸感慨無量に堪へません。でも一旦荒廃せる郷土から復興への途上にある各地においては、尚幾多の同窓生がおられることと思いますが、果して何処に如何に活躍せられているか、其の有様を知る機会もありませんがさいわい、此の度同窓会便りの試が設けられて、追々に学校及同窓生の消息を知る機会の出来たことを喜んでいる次第です。

戦時中克く苦難の道を堪えてきた我学園は日本再建の曙光と共に大きな栄光を常じて春草の如く芽生えてきつゝあるの秋に待して一入悦にひたつているのでありますが、此の裏には涙ぐましい耐乏の戦と続けてこられた母校の諸先生をはじめ在校生諸君の御苦労並に幾多同窓生各位の御後援のあったことを思い起して唯々衷心より厚き感謝と敬意を表せずにはおられません。今日大阪経済大学という天下の大学として発足しつゝある母校の姿を見て、尚満足への発展を期待している次第です。各所に奮斗しておられる同窓生の皆様どうぞ母校の安を又ありし日の学園生活を想い浮べて御消息を御聞かせ下さい。

特に第三回卒業生の皆様、是非近況御知らせ下さい。参考までに貴重な資料を拝借して私の勤務場所を書かして頂きます。

守口市守口町五反田、京阪神急行電鉄株式会社守口車庫部内

——以上——

第四回卒業生ニュース

第四回　中村源

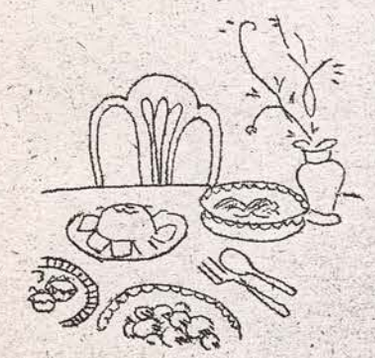
終戦後是非共同期生の集会を実施したく思っておりましたが、名簿も手許になくそのまゝになっておりました処、昨年母校の御尽力により出来上りました名簿により先づ京阪神におられる同期諸兄の親睦をとでもいう形で同期三木薫君の御協力により昨年七月二十四日午后二時より大阪朝日ビルでアラスカムで会催いたしました。名簿により二十五名に対し案内状送りましたが結局出席されに諸兄は左記の通りであります。当日出席諸氏の希望もあり今年も近く同様会合を予定致しております。尚母校よりも大北、藤原先生等も御出席頂いて一層本お話も承ります様計画しております。

二十三年七月二十四日出席者

櫻井秀雄　勤め先　日本通運大阪支店

現住所　大阪市住吉区粉浜本町四ノ六二

同誌考案　現住所　大阪市阿倍野区天王寺町二五八ロ　西村一方
宮平盛助　勤務先　大日本製蓆株式会社第三工場　現住所　大阪市旭区大宮町八ノ四　瓜川一五ロ八
原　秀夫　勤務先　大阪住友海上火災保険株式会社　現住所　京都府伏見郡銀閣寺町上町
小宮山清秀　勤務先　株式会社大阪瓦斯製作所　現住所　大阪市城東区浦生町四丁目三ロ五
森元稔樓　勤務先　株式会社　野村商店（化粧品部）　現住所　大阪府下南河内郡富田林町字宮田五八ロ
三木　薫　勤務先　三菱化成大阪醸造事務所　現住所　大阪市阿倍野区昭和町中五丁目一七
塚田久雄　旧名字野　勤務先　日新機械製作所　現住所　大阪市西成区姫松通五丁目二二　天下茶屋（三ロ七六　二五ロ七）
中村　孫　勤務先　株式会社　日立製作所大阪営業所　現住所　大阪市天王寺区堂ケ芝町八二



若人へ!!

第七回　比企　聖

大学への昇格を心からお祝いすると共に、萬歳を叫ぶ。何か感想をということであるので、何りの参考にでもなればと思い感想とのべる。

たゞはある貿易会社に勤務している一傭給生活者である。

現在の貿易業務は、ある面に於て一般人が考えている貿易と全然異なっている感がある。即ち、今日の貿易業務は何事に於ても社を遮せず、一分一秒でも早く事務を処理したものが他を制して勝利を得ている。之はわれわれの貿易業だけではないと思うが、その結果他より一分一秒でも早く事務を処理するためには何を以てするか、人力、金力、機械力等々ある。而し現在の如く金融面に於て相当制肘をうけている時に於ては限られた人員、限られた金融面で以て最大の効果を挙げることより外に方法がないわけである。然らば如何にしてこれを実行するかといえばその一方法として人の寝ている間も寝ずに仕事をして目的を達成することである。十六時間残業即ち十四時間勤務が生ずるわけである。この二十四時間勤務の連続が仕事の面に於て他より一分一秒も早く制することであると考える。指令が出るそして出来上るまで寝ない。当社に於ては明日という言葉はない。三十二時間勤務は週に一乃至二回は必ずある。七十二時間勤務も平均二乃至三ケ月に一乃至二回は必ずある。吾々も人間だ、眠りたいのは当然である。而しフアイトのある者、責任感のあるものは寝ない。勿論こゝには観念の持ちかが根本となる。即ち、資本家は資本家、労働者は労働者という考え方、換言すれば自分はサラリーマンだからサラリーマンだけサラリーマンらしく働けば良いという考え方（吾々は敢えてこれを月給盗人と称している）と自分も資本家であり、資本家の一員として会社を実際に運営しているという考え方、いいかへれば自分が会社であり会社が自分であるだから自分が働かなければ会社の動きが停ってしまうという考え方（吾々は之を敢て絶対弁証法的行動と称している）である。

学生時代レスリングの主将であつた偉大なる体躯の持主が二十四時間勤務の翌日には駄目だとのびてしまうかと思へば、大した運動もしていないしこの身体でと思うものが七十二時間勤務を眼を血走らせながらも平気でやっている。

これは身体の強弱ではない。精神の持ち方一つであり、フアイトと責任感と絶対弁証法的観念の持ち主であると見做して良いだらう。かゝる人間を実社会に於て養成することは不可能であるといって過言でないだらう、実社会には種々の障害が多すぎる。之を養うのは学生時代をおいて外にないだらう。意見の交換、討論は別だが空論的理くつは通らないのが実社会だ。

つい最近本社の入社試験官の一員として私は立会つた。そして慶大、早大、東大、専修大、海兵、青山学院と各種各様の受験生が来た。その内これと思うのを六名採用してみたのにこの六名の中に吾々の求めている様な観念の持ち主は一人しかいなかつた。又何の役にも立たない机上の空論をもつともな理論の如くこねまはして、いざ実行となれば尻り込みするいわゆる理くつ屋型が、自分にこんなことは出来ないという放棄型が多いと思う。現在の若い人（右の少数の例を以て律するのは悪いかも知れないが）は、余りにも現在享楽的であり、自己の責任も果さず、自己权利を主張しすぎるの感がある。自己のなすこともせず理くつをこねる。そして何かといへば自由主義を主張する。何かと考へちがいしている様だ。机上の空論は学生時代には通る、しかし社会に於ては義理付けのない理論は通らない。

自己のアウフヘーベンと口体のアウフヘーベンは不可分離的関係にあるということを知らなさすぎると思う。

現在の日本には自己を反省批判することなくしてサラリーマンのサラリーマン的考え方の持ち主が多いのではなからうか、吾々は今後の学校教育にというより、大経大の教育方針によつてフアイト責任感、吾々のいう絶対弁証法的観念の持ち主を一人でも多く社会に送り之を大経大色といわれる様にしていただきたいと望む。

若人よ！　この自分の考え方、観念を古いと笑う者は笑へ!!

而し、現在社会の要求しているのは、これを笑う人間ではなく、之を真剣に考える人間であることを銘記せよ。

（二四・三・二・日下部産業K・K　貿易課長）

労働者は折々に勝利するがそれはたゞ一時的にすぎない、彼等の斗争の真の效果は、益々拡大してゆくその団結である。

（アルクス）

現代の反逆性について
―現在社会の表情―

琴九回　注連　稔

人間の心情に憧憬の輝きがあるのは、得ることの可能性のもっとも少い時である。ということは文芸家の言葉をかりるまでもなく自明である。自己の中に潜める凡ての可能性の完全な達成――人間の永遠に求めるものだとすれば、現代は何と望みない時代であらう。勿論併しまその輝きも現実の冷い壁にさえぎられて消えてしまう。此の意味に於て現代人は全て何等かの意味に於て意識すると意識しないとにかゝはらず、現代への反逆を胸に蔵している。

これが文芸に現はされると現実に対する反逆に意志表示として田村泰次郎のいはゆる「肉体文学」として表われてくる。……併しここにても現代に対する反逆性は未解決のまゝ残されているのに、吾人は早や軍なる肉体文学では深く現代にもみこんだ、現代の反逆性は消すことが出来ない。

ではこの不満を如何にして処地すべきであるかということは学面の問題なのである。しからば、近時社会問題として取り上げられた太宰氏の場合の如くに、此の現代に反逆するに死を以てすべてを解決すべきであるか。だが死をもってする反逆は反逆ではなくて逃避である。現実よりのずるい逃避に外ならぬ。そこに幾多の血と涙にいろどられた苦しい言いわけがあらうが、それは決して容認さるべきではない。真の反逆は苦しい世の非難と迫害のたゞ中に敢然として生きて己れの信ずる道に邁進することにある。

(5) 真の意味の反逆はそんなにやさしいものではあるまい。

又近頃新聞を賑わした哲学青年の自殺事件にせよ一考を要する問題ではなからうか？彼等は現代の社会に反逆を試みた戦後の生活の悪化道徳の低下に清純なる彼等は、生を続けることは出来ないという意味の言葉が残っていた。思へば長い間我等世代の人間は自我の発見ということから目をかくされて来た。軍隊の下に有って「是れ神の思召なり」いわゆる軍の命令という至上命令でしばられて来た。かくして得た自我の発見、斗いとってデモクラシーも冷い現実の前には生活の惨敗者となって現れてきた。勿論われわれ青年は、現代人が欧洲の近代史が自我の発見と人間解放のために中世封建制度と教会制度とのはげしい斗いを勝ったために苦心した様な努力と見逃すわけではないが、

斗いとった個性解放、デモクラシーは、あまりにも消化し切れない恨みがないではなかった。そこにわれわれは過渡期としての思想的矛盾みにでくわした。新しい与えられた民主々義に対してそこに現代に対する反逆性が深く蔵せられたことは決して忘却さるべきではない。これ要するに現代人は反逆――現代に対して多少の――を心に蔵している。併してこれは現実の冷い生活難と共にわれわれを客観なく現実の逃避へとかりたてる。吾人は此処に於て自覚めかけた反逆の精神を現実の逃避に追いやることなく深く深く現実に徹してそこから雄々しく立ち上らなければならない。

デルフォの神殿にかけられた「汝自身を知れ」という言葉は、現実逃避に追いやられがちな、わが世代の青年にとっては新しい意味に於て反省すべき言葉ではなからうか。

(6) 現代への反逆精神は、斯くてこそ意味を有つものだと思う。

―以上―

青年の危機に対して

第十三回　山田　悦子

最近青年の自殺、失踪を耳にする毎に肌に栗立つ思いがする。一体これはどういう現象なのであらうか。自分の過去の教育過程、環境と思合してこれ以上の青年の危機はないと思う。一人の子、として今一度深省を要する緊要事だと思う。

教育において愛が問題にせられるのは大抵、教育者側の愛の問題で、教育されるものゝ愛を育てることについては看過されている。幼児が玩具を愛するのは本来的に愛の心がすでにある証左である。それを抽出し、育くもうとしないでどうして青年が隣人愛を持ちえよう哉。これまでの教育は子供に大人の世界を縮小した半大人的子供の生活を、所謂子供には縁遠い人工的な事柄を受動的に聞かせるのみであった。子供は決して大人の縮小でもなければ、その教育は受動的であってはならないのである。子供の活動は大人の模擬的なものではなくて、本来の経験、純粋な動機からの活動であり、子供の現実に即し、子供自体を主体とする生活の教育でなければならない。デューイのいういはゆる「幼児的社会」を確立しなければその教育は偽りだ。子供の生活を将来への準備期とする観方をやめて、子供の生活をそれ自身の価値において取扱うべきではなからうか。暗黒街のボスに利用されている多くの浮浪児が無頼の集団の仲間入りをし、罪悪の世界に蠢動しているのも、愛を忘れた大人達の仕業ではないだろうか。成長と同じく子供の教育は一つの動力であって、消極的な効果はいやそれだけに止まらず、必然的に子供の生命を毒する積極的な害になるのである。殆どの児童教育では、子供は家庭生活から得る経験と学校生活から得る経験との二種類の経験を別々に体験するという徒労に気付いていない。子供が家庭でも学校と同じ立場と態度をとるように子供の経験の統一という問題が隠蔽されている。また学校の内部にある致命的な無駄に教科の未組織、各学科の不連続や無意義な重複がある。この事実を教育の立場から見れば、徒労、無駄、不毛という消極的な問題に止らず、経験の混乱、性格の破壊、無信仰、懐疑などの結果を招いて、青春のなやみと死によって解決せんとするに至るのである。かような毒素の培養が現今の教育過程に充満していることは何という恐ろしいことであろう。

敗戦後の錯乱した社会の波に押流されて生活を裏付ける思想とか、人間存在の根據の薄弱さから青年は哲学を求め、哲学に生きんとしている。最近「青年と主体性」が現実的な問題となってきたが、主体性確立のため殺人せし学生の如く反社的実存主義者となり、抽象的な自我、主体、人格主義を標榜し、堕しては肉体主義、利己主義の傀儡と化している。死を礼讃し、自己の主体確立のためなら殺人行為すら許容されるといった言語道断な道徳感が往行している。青年の不安は一人青年のみに止らず、全人間の問題ではあるが、人間存在自体が不安なのではなくて、自覚的存在が不安なのである。青年に自ら人類を

受し、自らが幸福になる努力を教育が取扱っていたなら、かくも青年に希望を失わせ、自我礼讃者とはしなかったであろう。過去の強制的臭味のする訓育が如何に愛を伴わぬ形骸的なものであったか、愛を合理的に育くむことを忘れた半大人的児童教育の欠陥がかくいう毒素を青年層に浸透させてしまったのだ。

六、三、三制も軌道にのり我々の母校も新制大学としてこゝに自主たく誕生した。学園に青年にはこの青年のみの「幼児社会」を確立するよう、我々同窓生一同和して暖かに見守らうではないか。

"だんけつ"

第十四回　柴田　悦子

口にこそ"搾取"とか"労働強化"とかうそぶくが、現実に労働者と話したことさえないという学生連中、今度の大学法案反対斗争で労組へ提けいに行きほんもの、労働者と接することが出来て本望(?)の至り!!……。

騒音と息づまる煙とほのほと真赤にやけた鉄板とたくましい労働者とが、とっくみあっている広廷工場の見学の後、労働者との座談会——労働者たちはみなにこにこして何か話したがうなのに、私たち学生はかたく座ってかしこまっている。しかし、とにかく話は進み、労働法規改悪、大学法をめぐっていろく意見がかわされた。その中の一人が、

「あなた方は今大学法に反対して私たちと共同斗争をやらうときてとられるのですが、あなた方は学校を出れば課長になり、局長になる道が開けているのです。あなた方が卒業されゝば私たちはあなた方にしぼられるのですから、今学生との共同斗争に頼をむけないのは当然ですよ。私たちが一番望むのは、卒業されても今と同じ様に私たちの味方であってほしいことです。」と真剣に訴えていた。

＊　＊　＊

私もこの時労働者と話しにくかった。彼等は何事に対しても真直だ。しかも要点は根本問題にふれていて鋭い。これが私たちをひやひやさせた。彼等は何のこだわりもなく私たちに親しく友達の様に話しかける。私たちは益々やりにくくなるばかりだった。私は、学生たちが(私もこの一人だが)労働者の質問に対して、自分がはっきり理解していないことをもごま化してむつかしい言葉で話すのがとても聞きづらかった。私もたしかに自分の能力を知られるのが嫌なため、わかりもしないのにわかった様な風をすることがある。そしてやたらにむつかしい言葉を並べるのだ。つぎはぎのゴムまりの一兵をつけば他が破れるので、そっとしてをけば表面だけ立派な大学生、インテリゲンチャというわけだ。

労働者はこれでは満足しない。又これだから私たちと話しにくいのだ。これで労働者の解放とかいうのだから、ますますわけがわからぬ。我々は先づ利己心を除くことだ。そしていかげんな生意気さをのけて真直に自己を表現すべきだ。話にくいのは、自分をかたくしばりつけている学問のてんそくをはづす努力をしないからだ。相手の前で自己を大たんにさらけ出すことを嫌がるからだ。相手を真に愛さないからだ。

＊　＊　＊

現在社会の客観情勢と冷静に分析した場合、政府の行いつゝある如何なる政策もどれ一つとして人民大衆の利益になるものはない。労働組合の賃上斗争は頭打ちの状態にある。賃上げどころか中小工場では二月分の給料さえまだ払っていない様な状態だ。これに加へて首切り、公務員四十八時間制、労働法規改悪、大学法案、ものすごい税金、等々。政府の主観的意図はどうあらうと客観的上大衆は日に日に貧困化し、中小企業は倒産つまりから続々たほれ、あらゆる面からの外資導入、更に加ふるに軍一辺倒設定により民族産業は危期にさらされ、一方民族文化は抑圧されようとしている。我々は、今や自由と平和と独立を実質的に奪はれつゝあるのだ。更に憲法改悪、非日本自衛隊設置、やがては特高の復活かとさへ疑はれるファシズムが頭をもたげてきているのである。今度のファシズムは、うっかりすると出来ぬまされるから危険だ。もはや今までの様な個々の斗争部門において特殊な階層の人のみの、又それぞれの問題内での斗争では絶対解決もなければ勝利もない。背後にのさばるファシズムへの斗争、我々全人民大衆の唯一の敵に対しての斗争こそ我々を戦争から守り、自由と平和から守るのである。今後のあらゆる斗争の唯一の武器は団結である。学生も、昔の様にきどっている段階ではない。堂々と労働者と農民と市民と全日本の青年組織と更に全世界の青年と手をにぎらねばならぬ。これには先づ、謙虚に自己を批判しよう。そして大たんに大衆の中へ入り、謙虚に大衆に学ばねばならない。

（をわり）

姫路支部の近況について

支部長　第六回　永川　仁一

私が大阪生野の前身である昭和高商に入学いたしましたのは今から十一年前即ち昭和十二年の春であり、当時姫路地方からの進学者は極めて少数でありました。それでも同志互に集り、時局を論じ、青春を謳歌し、意見を交換し、親睦の意味に於て、同年五月上旬には春嶺の「いろは」に於て、わづか二円の会費を出し合って、姫中会なるものを設立し懇談会を開催いたしました。その時は僅か数名の会員でありました。爾来姫中始め西播地方の各中等学校に呼びかけて宣伝を努めました結果、毎年当地方からの進学者の数を増し姫中会もこれに呼応して会員数を増加し、春の新入生歓迎会及忘年会といったものを一年に二回程開催、引続き同十五年春私が関西学院大学に進学しましてからも、この懇談会は引続き開催されましたが戦争が次第に熾烈苛酷を極め、同窓にして出征する者も日増しにその数を増し、反対に当地方の同窓は少くなり、遂に二十年のみ会合を中止致しました。やがて終戦ラッパと共にこが回復に努めました結果、去る二十一年八月下旬には終戦後初の姫中会を開催、母校より藤原先生も出席され、約十数名の同窓の参集を得て非常に盛大且つ有意義でありました。

反面、この姫中会とは別個に終戦後当地方同窓の間に姫路市を中心

として西播地方の同窓生が打つて一丸となり、姫路支部を結成してはとの意見が有力になつたのでありますが、当時は罹災疎開その他で名人の住所連絡が不十分であり、約四ヶ月間調査連絡をして支部結成の発起人会を二十二年十二月下旬に開き準備万端整いましたので遂に二十三年一月十八日午后二時より姫路市道養町名和ホテルに於て、支部結成会を開催、母校より大北教授、藤原教授出席され同窓の一堂に会するもの二十四名に及び支部規約を審議し役員を決定、午後四時盛大裡に支部を結成いたしました。なほ、支部の役員を次に記してみよう。

支部長　永川仁一　　副支部長　御内明

幹事　尾西幸雄　吉田常信　上村哲也

会計幹事　坂口一男　伊勢信一

なほ引続き本年八月八日午后一時より第二回目の支部総会を開催、岡山よりはるばる黒正厳博士、母校より大北藤原の二教授も出席され、同窓の出席者二十余名に及び、黒正博士より母校の現況、新制大学昇格問題について隔意なき意見を聞き大北藤原両教授より昇格過程寄附金その他の問題について話を聞き、自己紹介懇談に移り午后四時半有意義に終了いたしました。今会合には紅一点、高原みほ子、高尾わさ子の二嬢も出席され、和やかな雰囲気の裡に議事を進行させることが出来ました。

次に支部の同窓は約一〇〇名（内在学生約四十名）に達し、支部の発展は今後に期して待つべきものがあると確信しています。右のよう

(9)

に当支部は多数の会員を擁しているのでありますが、今後の支部の在り方はせめて少くとも年に一二回位は総会を開き各自の復帰なき意見の交換をなし親睦の度を深めて行くと共に本校の真価値を当地方民に再認識せしめるという意味において近き將来黒正博士を隊長とする母校教授陣による経済思想講演会を開催したく思っています。と共にこが実現を大いに期待しております。

他面理想論と致しましては將来例へば甲という同窓が或る事業を開く場合にその地方の同窓がその分に応じて積極的に協力しあうように固い団結が必要であり且つそうあるべきであると思っています。ともあれ支部結成後日なほ浅く且つ私としましても極めて微力非才ではありますが、大いに頑張って母校のため又支部のために微力を盡したく考えてとりますので、この支部の運営とか在り方その他に対しまして御意見がございましたら何卒御遠慮なくお洩らし下されば幸甚と存じます。

私は次のように考へてとります。「ローマは一日にして成らず」と。不平不満と意見とは紙一重であり、その表現の場によって区別されるのである。即ち陰でこそと表現するのはどんな貴重な意見のように思はれてもこれは単なる不平不満である。しかしながらこれとは反対にどんな不平不満と見受われるようなことでも面と向って、挨拶すれば人の面前に於て表現すれば即ち意見である。従って私は陰でいうことなくどんな微細なことでも面と向って表現する意見を尊重するのであります。

石碁に衝撃ではありますが姫路支部の生い立ちを略記し御挨拶に代えたいと存じます。同窓生諸氏の御健康をお祈りいたします。

（一九四八、十一、三〇　記）

(10)

母校昇格を祝いて

神戸支部長　第一回　外海波吉

此度母校が経済大学に昇格決定した確報をきき、大変うれしく存じます。前々より黒正校長始め大北藤原教授等色々御苦心されている御様子を伺っていましたので先生方のおよろこびもさぞと存じます。今度同窓会ニュースが発行されるので一文書けと藤原先生よりおすすめいただきましたので同窓会支部の様子などお知らせ致したいと思います。

同窓会神戸支部は昨年三月福知長谷川諸君の御霊力で発会の運びとなり一回卒業生というので私が支部長に選任うけました。その後三回総会を開き、その都度黒正校長始め大北先生藤原先生等の御出席を得ていろいろと母校の様子、昇格問題などの御説明をきゝ、及ばずながら御手伝させていただいたのですが充分な事も出来ず申わけなく思っている次第です。

神戸支部は現在会員一九一名、内女子四一名で大体尼崎から明石までを地域としているのですが、連絡不十分であるためか、まだこの区域内で入会して居ない方もある様思はれますので、幸ひこの二ュースで御承知になった方は御入会下さればうれしいと思います。

同窓会総会などお席しても面白くないと思われる方も沢山あるでせうが、支部の会はいつも大変愉快な時間を過しております。黒正校長御説の毒舌マなど是非一度お席してきいて頂きたく思います。いくつになっても学生時代の生活にはよい思い出が残っているはずです。その幾分でもが同窓会で味へたら決して二、三百円の会費も高くないと思います。黒正校長始め熱心な先生方の御指導があれば大阪経済大学が復興なり母校の先輩であることを自慢するために又自慢しつゞけていられるために同窓会を又母校を忘れないでいたゞきたいと思います。

里人がなくなり、航空機工場がなくなった今日、経済商業が再建の第一線となった今日、吾々の母校が又卒業生たる吾々が期待される所頗る大だと思います。母校の発展と皆様の御活躍を心より祈って第一号同窓会ニュースへの御挨拶といたします。

―おわり―

同窓会の近況

(A) 昨年の総会において決定を見た本部の役員諸君は次の通り。

理事長―市原卓爾（一）

常任理事　豊田砡（一）　秡原四郎（二）　渡辺達好（三）　中村源（四）　前田義一（五）　川島正作（六）　餌嶽貫　山下三吉（一）　山上善孝（二）　村田秀雄（三）　世良錄次　磯野有（三）　河原健一郎　服部博（四）　清水忠文　和田穣（五）　和田勇（六）　尾上東一　比企雪　石橋正俊（七）　菜田秀一　宮前旭（八）　飯田秀二　荘連穣　大江寛（九）　武内美次　中平秋太郎　河盛富三（十）　盛宝実　桑萍昇（十一）

一岡謙二、坂上謹之助、斉藤清（十二）　中村美智子
山田悦子、奥村明子（十三）、井上寿子、村井昭子、
向山実文（十四）
大北文次郎、奥村日出男、藤原光次郎（母校側）
監事　城加秀治（十）

(B) 支部

東海支部（支部長ー岡田佐市　名古屋市中区鉄砲町一ノ二ロ）
神戸支部（支部長ー外海波吉、神戸市須磨区離宮前町一九二）
姫路支部（支部長ー永川仁一、姫路市外新西）
岡山支部（支部長ー浜賀市　岡山市大供、中口銀行仁王町支店）
広島支部（支部長ー田辺忠司　広島市古田町高須、芸備銀行）
石川県支部（支部長ー中川清　石川縣金沢市大樋町四五）
（尚、支部の情況は出来るだけくわしく本部へお知らせ下さい。又東京その他支部未設置の地方は之の際結成して頂きたいと思います。又支部の總会の所にな、なるべく母校から先生方にも出席して頂くよう取計いますからその節には本部へ御連絡下さい。）

(C) 会員名簿　昨年各回毎に謄写版ずりにして御送りしましたが、まだまだ不完全ですから、住所、勤務先など変更の場合にはぜひ本部宛御通知下さい。本年度も作成する予定です。

(D) 同窓会ホールの設置　本年四月から大阪市北区北浜野村ビル（市電北浜二丁目と東へ半丁南側）の五階如水会の会場を毎月第一土曜日午后一時から五時まで借りうけることにしましたから、会合連絡、休息、その他に自由に御利用下さい。四、五十人までの会合が出来、茶の利便もあります。その日は母校からも誰かに来ていただくよう取計らいます。）

(E) 今回第十五回生二百三十一名を正会員に加え、会員總数三千名に達しました。

母校だより

(A) 職員

黒正　巌　・　岡山市口富
教授　大北文次郎　豊中市櫻塚元町四丁目九
〃　西島彌太郎　大阪市東住吉区田辺西之町八丁目二
〃　藤田　敬三　堺市上野芝向ケ丘町一四〇五
〃　奥村日出男　大阪府三島郡茨木町下中條二七三
〃　信垣　良一　大阪市東淀川区豊里町五九三
〃　黒羽兵治郎　大津市孫本石場町二二
〃　尾尾　正助　京都市中京区新町通六角下ル、三井別邸内
〃　菊田　太郎　大阪府北河内郡守口町六九九
〃　藤原光治郎　尼崎市森二八五
〃　梅田　武文　大阪市旭区豊里町平田一七ロ五
〃　浅沼　玄慶　大阪市東淀川区瑞光通二丁目六
〃　風間　鶴壽　京都市東山区今熊野南日吉町一九九

(12)

教授　石川　澄　大阪経専内
〃　清水寿次郎　香川県丸亀市風袋町八ロ
〃　飯沼　馨　京都市上京区大宮林裏町二ロ
〃　本田　利夫　大阪府中河内郡龍華町大字長瀬井三二二
〃　藤谷　謙二　奈良縣生駒郡南生駒村字一分一一六三
〃　井上　清　大阪市天王寺区勝山通一丁目一ロ
〃　吉岡　義睦　大阪府北河内郡枚方町香里園管区
〃　渡部　徹　豊中市原田八ロ七
〃　木村　保重　神戸市灘区篠原北四丁目四
〃　秋本　吉郎　奈良市北室町一三
〃　中村九一郎　京都市東山区三條通西入ル足立新三方
講師　菅多村俊夫　京都市左京区北白川追分町一ロ
〃　奥山　勝　京都市左京区荏市ノ前町二八
〃　久野　收　京都市上京区浄福寺通り中立売上ル山本恒太郎方
〃　藤野　渉　京都市下京区佛光寺通大宮西入坊門町
〃　辻部政太郎　小林生活工業社内
〃　川原吉次郎　大阪府泉南郡佐野町一二五ロ泉木材工業内
〃　菅沼舜治　大阪市住吉区田辺東之町七丁目八
〃　竹村　茂助　大阪市阿倍野区阪南町西五ノ一　大阪高校官舎
〃　鑄方　貞亮　大阪市阿倍野区昭和町東二丁目三ロ
〃　磯川　治一　高槻市新京町二九一
〃　吹田市旭町一ロロ九

講師　平田　隆夫　京都市上京区紫竹牛若町四七
〃　牧野　正久　大阪市北区中之島　阪大理学部
〃　平野　章　大阪市天王寺区上之宮町一九　累進電気方
〃　西川　清治　西宮市屋敷町一三五
〃　富沢　周夫　大阪市阿倍野区阿南町中二丁目一三
元教授　高木　真助　山口経専教授
〃　中村清次郎　高槻市役所
〃　青山　秀夫　京都帝大教授
〃　建林　正喜　広島市西観屋町四五五
〃　三浦　利定　東京商工会議所　産業課長
〃　阿部　実　山口経専教授
〃　上田薛十郎　高知県伊野町
〃　森谷　謙　富山市安養坊九一七
〃　津田　穣　京都市上京区出町橋西詰
〃　大浦　幸男　京都市左京区下鴨北園町二三（三高教授）
〃　近藤　洋逸　倉敷市住吉町二二六
〃　寺尾　宏二　京都市左京区北白川小倉町五〇ノ二。（京都大学厚生課長）
〃　小村　武雄　三重医大
〃　内多　毅　京都女子大学
〃　武田長太郎　岡山縣上道郡財田村字工田
〃　山田　一雄　神戸市須磨区五位池町三丁目一一一（神戸商科大学）
〃　ハッラー　大津市三井寺下

(B) 新制大学への転換に伴い、本年度は大学一年約二百名（男女）同二年約二百名（男女）の生徒募集を行うと共に、他方大阪経専第二学年への編入約百名を臣下募集中である。出願期日は三月二十日から三月二十二日まで、試験期日は三月二十六日七日の両日で、身体検査の外に学力検査として国語、社会、数学又は理科、外国語（英語）の試験が行われる。詳細必要な方は直接学校へお問合せ下さい。学校電話 豊崎二ロ四。

(C) 市バス開通　昨年十二月から天六―瑞光通間の市バスが開通して母校の真側に「圣母前」という停留所ができ、大阪市内から学校までの距離は非常に短縮されることになった。市の中央から学校まで僅々三四十分。天六からの区間は二区、十数分おきに運転され、あの上新庄から学校までの長い道を歩く労苦から解放されただけでもありがたい。同窓生諸君も大いにこれを利用してたびたび母校に足をのばしていただきたい。

(13)

感謝

一昨年以来、母校の新制大学への転換に関して、会員各位の御援助をお願いしましたところ、至清然諾の最悪の時機にもかかわらず、多数の皆様から巨額の御寄附を賜りまして、誠にありがたうございました。左に醵金者の御芳名を記して、感謝の意を表します。（敬称略、順序不同）

大北文次郎
市原卓爾

第一回卒　市原卓爾、豊田砿、山下三吉、島野武雄、数内正博、保野守造、外海敏吉、青柳護介、沢井市雄、上野幸一郎、松村浩、重田広太郎、

第二回卒　山上善彦、中村吉蔵、尾西幸雄、藤本美則、関茂義、大山清、重原佐伊忠、村田秀雄、竹中兵、近藤一郎、山田政治、原田慶一

第三回卒　渡辺隆好、河村正信、河原正一、法貴道礼、清水好博、小田義、細川正三、紫山正信、長谷川繁信、吉田教高、玉井芳郎、大西隆蔵、

第四回卒　横本義秋、中西三郎、中野春雄、小宮山清男、服部米次、佐々木聰、冨田重雄、中村源、南聡、三木薫、森元裕孝、大内計治、國塚茂、柳田通雄、服部博、藤長俊夫

第五回卒　冨山重一郎、前田義一、筧源清、瀧山義晴、矢野繁吉、年長一、中島薫、福島繁、佐野督之助、和田稔、福田覚治、倉垣一郎、水谷卓、重本月水、吉田彰男

第六回卒　中島靖夫、西山良元、原譲、黒川源太郎、小林茂、長谷川平八郎、三好博彦、岡田佐市、松村隆夫、土手勝次、佐々木善男、平佐太介、水野文雄、大森孝太志、川島正作、松本輝、森脇孝男、野草寿、和田稔、三宅早苗、

第七回卒　川瀬良二、武内真一郎、田中次郎、喜多健二、鈴木博三、冨田辰馬、長谷川哲郎、新田正信、永末優、高島暁美、高橋祖清、前田寿弘、藤本美幸、岡田好正、中山正健、長尾泰民、横田博明

(14)

佐藤敏、生田薫、福地正一、武田英之助、中村源蔵、佐々木義夫、中西勇之、寺松英之助、永光爵夫、坂本新治、武田一郎、島田達男、大岡貞郎、内藤喜市、高井和夫、高木肇、守野孫三郎、佐藤豊次、高島良一、久保雄一郎、田辺忠司、高橋勝郎、千光士又三郎、太田龍馬、内田元愛、

第八回卒　上野善次郎、中村芳雄、板正武、石井清、松山昌夫、清水一郎、足利義正、藤嶋吉大、柴田秀一、石谷孝雄、臼井順行、浅野義雄、川吉一郎、吉本政勝、村木正夫、谷川徳五郎、小坂義生、田薫、三木美忠、高井孝雄、橋本実、中山清弘、阿部賀寿之、宮武忠智、板野良三、秋山幸郎、角田久次、吉田武人、

第九回卒　伊藤健治、榊原二郎、岩井正英、大江覚、吉永勝美、谷後一郎、青山尚、佐々木光雄、吉田初次、平田良、川上後藤、長島隆、法貴義七、村瀬克房、岩井正夫、左近太郎、赤沢七郎、山田信次、岡村智、富山義正、後野栄一、出原弘、平井一正、武川義夫、笹部岩男、浜野市、野本恒雄、村瀬克房、佐々木一義、北井清之、

第十回卒　久住茂樹、川田武彦、河村金吾、萩原市郎、久保秀一、田中義、大谷治義、土井及美、佐伯次郎、東麻造、山本春久郎、田井正男、筧源一郎、川下正男、湊健治、三牧正雄、佐藤清之助、福本幹夫、武内美次、竹内義、中平秋太郎、西出初三、田中義雄、浜本清、筑後次、笠々山誠、嶋津繁雄、辻野勝一郎、平岩正男、高田壮介、平野博之、岡本貞次郎、橋詰勝、北之坊治夫、

第十一回卒　内田茂、鷹野実、瀬川進之、加藤三一、及移信雄、竹田利雄、武田源太郎、池沢聡介、高井健三、桑津昇、岩谷宣治、山田芳弘、鳴井英夫、池田正義、福林進一郎、加藤正明、井上豊、藤井秀雄、内田正夫、井上稔、豊里実、南沢長一郎、田藤昌治、坂上光一、高橋明石、茂田美信、高木利夫、弦巻豊一、谷修自、倉田文男、桑谷徹、大野利義、小田輝夫、坪井久、坂田正旭、藤原博、酒井賢三、暖地昌利、谷田正太郎、曽我亮一、

第十二回卒　坂上隆之助、林田元三郎、保賀欽治、馬場薫、森正一郎、長崎和、山本隆一、藤井三男、中西昭夫、加藤勇、藤原大八、竹本利郎、大森経夫、千頭信雄、足田保、神谷善晴、高木敬三、竹村晴夫、塩原哲、田中陽、直鍋清郎、西迫鉄一、山下繁重、岡藤二、豊田直敏、大谷宏、定本良重、坪田正治、内田辰雄、三枝高次、中島太平、荒木幸雄、岩田源、太田裕雄、岸本忠、吉田分三、安達博、

第十三回卒　伊藤郁子、有本春子、津田綱子、原田和子、寒川房子、越宮良子、寺田さね子、遠藤芳子、與村明子、土井和賀子、水谷トシ子、福田幸子、山田露子、東内咲子、藤森輝子、有見美登里、笠井洋子、山下敦子、近藤美那子、宮崎淳子、山路美智子、千早敦子、佐野登代子、橋本能美子、上田ユキ、佐野武子、小林紀子、橋本喜志江、和泉光子、諏訪英美子、宮沢英子、市川シズ子、山本八千代、中山美代子、

馬場次子、稲田千鶴子、山崎和、小山和子、安見茂子、岡崎晴美、
森田稜子、島袋春織、岩井妙子、加藤園夜、本郷恵子、碼原芳子、
井上トモ、加藤恵、田辺幸代、野島幸子、谷田定子、

第十四回卒　高橋之雄、重力久美子、大山静子、高光俊江、
浅野和子、足立サユリ子、辰西聚子、篠子光子、高田寛子、
門川勝美、吉村富貴子、宮坂信江、福村百合子、辻公子、北村
マス子、木村貴子、馬場節子、小西弘子、足立節子、井村英子
景山喜久、森住佐子、吉村時子、郡井とし子、恵見豊、谷口敏子
北出富代、井上寿子、森島喜久子、遠藤ふさ子、田居園子、
茶田悦子、串谷綾子、北野馨、高橋幸、小林真佐江、田中和子
長谷部平、藤訪昭子、清原つたえ、市川静子、大平洋子、小原静子

○藤金総額　金三拾五萬四千七百七円六十銭也

尚記載もれの方は、学校庶務課宛御照会下さい。

編輯後記

○かつて発刊されていた「同窓会誌」は、戦争のあらしにいつしか押し流され、年を経ることすでに十年。同窓は出征、戦災、敗戦後の混乱などで、文字通りちりぢりばらばらとなり、同窓相互の連絡も、会の団結も思ふにまかせぬ情けない状態になつてしまつた。敗戦後三年、やつと昨年復刻の会員名簿を各回毎に発行する運びとなり、又各地で支部の結成が力強く押し進められ、他方母校も最近幾多の困難に打ち勝つて美麗新制大学に転換することとなつた。この秋に際して、萬難を排して「同窓会報」を発行することになつたことは、喜にたえない。

○思ひおこせば、母校にとつては幾転換の十年間であつた。昭和高商→大阪女子経専→大阪経専→大阪経済大学と四度び形は変つたが、しかし、そこにはつねに脈々として流れていた学園独特の精神があつたのであり、その精神の発展するところ、今日、大阪経大として結実したともいわれるであらう。母校と同窓会との前途は必ずしも坦々たる大道ではない。願くは、卒業生、母校の先生方、在学生の美しい協力の下に、同窓会と母校のより以上の発展を期したいものである。

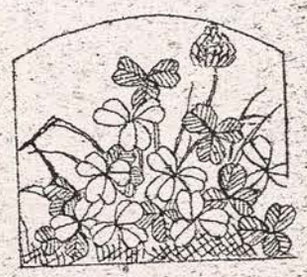
○そういう意味でこの「同窓会報」を会員相互の連絡をはかる一機関として愛していただきたい。そして今はこんなみすぼらしい姿ではあるが追々と立派なものに育て上げていただきたい。諸兄の積極的な御後援を

希求してやまない次第である。なほ、本会報は少くとも、年二回は発行する予定ですが、今回はとくに、母校の新聞部の発行である「至尊新聞」と合せてお送りすることとした。母校の近況を知るよすがともなれば幸である。

○折にふれての随想、論説、小説、詩歌その他何なりと、各自の職場から寄稿から、街から村から、どしどし御投稿下さるようお願いします。

尚、今回依頼しましたに原稿で未着の分は、次号にまわしますから不悪御諒承下さい。

（昭和二十四年三月十一日　M子生）



紐帯

（新校章）